

## 百年後の社会を空想する

稲宮 健一

電子情報通信学会の千二百号の特集として百年後の予測の記事が掲載された。小学生から高校生までが頭に浮かぶ未来の夢を書いてもらい、本学会の情報処理の専門家の意見と共に編集された内容である。

一例として、小学四年生の意見を要約する。私は今、百年後の世界にしていると想定した。そこは緑豊かなで、美味しい空気が胸一杯吸える美しい社会だ。AIと量子テレポルトが高度に発達し、どこにいても移動先と同じ体験ができる。不要になった道路は緑豊かな街路樹が覆う。

工業高校三年生はロボットが人に限りなく近くなった夢を語っている。筆者は女性で、そばに男性のロボットいる。このロボットは本当に人そっくりで、人との区別がつかない。今、一緒に歩いているところは公園のような広場で自然に囲まれているが、どこが本当の自然か、作り物か分からない。彼女はロボット一緒に歩いていて幸せを感じ、一緒にいたいと思うが、相手に感情がなく、自然と作り物が混然とした中で生活している。

SF作家、アイザック・アシモフはロボットについて、ロボットは人に危害を加えてはいけない、また、人に服従しなければならぬ。しかし、服従であっても、危害を加える命令には従わないという原則を述べている。ロボットの外形と言えば、昔も今もそれ程変わらないが、中身は時代の推移とともに大きく変化するようだ。ICの微細化による情報処理能力が指数関数的に増大し、AIの進化をどんどん取り込み、いずれ、人の能力を超えるのではないかと危惧されている。人は世代変わりがして、人から人への伝承に不連続があり、世代変わりの時点で、次に残すべきものと、廃棄すべきものを選択する。人が築いてきた倫理感に基づく。百年後は多分、ロボットの外觀は人とまがうようになるだろう、しかし、頭脳部は壊れない。AIは自己増殖するのではないかと言われている。ジギル博士への進化なら良いが、ハイド氏が顕在化するると世の終わりになる。